

コラム② 二二世紀の「新発見」

二枚目の「真正の肖像画」、ライプツィヒに還る

バッハの肖像画といえど誰かが真っ先に思い浮かべるのは、学校の音楽室などに飾られている、かつらをかぶり、深緑色の質素な上着を着て、手に楽譜を持っている肖像画だろう。

これは、ライプツィヒの肖像画家エリアス・ゴットロープ・ハウスマンが一七四六年に描いたもので、生前に描かれたバッハの肖像画の中で唯一、真正と断定できるものとして知られる。というのもこの肖像画は、バッハが、弟子のローレンツ・クリストフ・ミツラーが設立した音楽家たちの交流団体「音楽学術交流会」に入会するにあたって、提出を義務づけられたものだったのだ。「音楽学術交流会」のメンバーには、テレマンやヘンデルなども名前を連ねており、音楽家の名士会のような性格もあった集まりだった。

会員は年に一度、交流会に作品を提出する義務があった。肖像画でバッハが手にしている楽譜は、交流会に提出された《六声の三重カノン》BWV1076である（この《カノン》が、楽譜には三声しか書かれていないものの、その三声を反転させると六声になるという凝った作品であることは、しばらく前に「題名のない音楽会」でも放映されて話題を呼んだ）。

バッハの肖像画で、このように具体的な証拠が揃っている作品は、ハウスマンのこの絵だけである。それ以外の「バッハの肖像画」とされるものは、「伝」の域を出ない。ハウスマンの肖像画がバッハの肖像画の代名詞になっているのも当然なのだ。

今ではライプツィヒ市が所有しているハウスマンの肖像画は、歴史博物館として機能しているライプツィヒの旧市庁舎の一角にある小部屋に飾られ、バッハ詣でのハイライトのひとつとなってきた。

二〇一五年、まったく同じ構図のハウスマンの肖像画が、バッハ・アルヒーフに寄贈されて話題となった。寄贈者はアメリカの慈善家、ウィリアム・H・シャイデ氏。彼はこの肖像画を六〇年以上所蔵していたが、本家本元であるライプツィヒに返すことを決意したのだという。

第一報を聞いて、しんそこ驚いた。さては旧市庁舎にあるあの肖像画は偽物だったのか!? と思ってしまうほどである。

そうではなかった。バッハの依頼があったのかどうかは不明だが（そして筆者は不勉強でその存在を知らなかったのだが）、二年後の一七四八年、ハウスマンは同じ肖像画をもう一枚作成していたのだ。二枚目の肖像画はカール・フィリップが譲り受け、一九世紀にジェンケというユダヤ人の一家が買い取る。第二次大戦中、ジェンケ一家はナチスの迫害を逃れてイギリスに移住したが、肖像画に危害が及ぶのを恐れて、友人である「ガーディナー」家のドセットにある別宅に、しばらくの間預けていた。

実はこの「ガーディナー」家こそ、ジョン・エリオット・ガーディナーの一家である。ジョン・エリオットは、家の階段の踊り場にかかっているこの「カントールの眼下で」子供時代を過ごしたという（ガーディナー『バッハ』より）。戦後この二枚目の肖像画は、ウィリアム・シャイデに買い取られたのだった。

二枚目のハウスマンの肖像画は、現在、ライプツィヒのバッハ博物館に展示されている。一枚目の肖像画より彩色はぐんと鮮やかで、バッハの表情も生き生きとして、私蔵されてきたメリットが感じられる。ライプツィヒに行かれることがあったら、ぜひ二枚を見比べてきていただきたいと思う。

「容貌」への飽くなき追求

ハウスマンの肖像画は、「バッハの容貌」を知る際に、常に手がかりになってきた。一八九四年、聖ヨハネ教会が建て替えられるのに際し、その墓地に葬られたバッハの遺体を特定する作業が行われたが、その際にも、ハウスマンの肖像画に似ていることが重要な手がかりのひとつとなった。バッハの遺体を特定したのは解剖学者のヴィルヘルム・ヒスだったが、彼は遺体の頭蓋骨の模型を作成している。この模型をベースにして造られたのが、聖トーマス教会前（正確には横）に建つ、彫刻家のカール・ルートヴィヒ・ゼフナーによる有名な銅像である。

より詳しい「バッハの容貌」を追い求める試みは、二一世紀に入っても続いている。アメ